

2024/6/9

ルカの福音書 講解メッセージ⑨

『ルカの福音書 4章 21-30 節 「苦しみ」の福音』

■苦しみ

キリスト教は苦しみの教えです。闇がなければ光が見えないように、苦しみを通してなければ見えない光があるのです。キリスト教は真の光を教えます。苦しみは、私たちが神へと導くコンパスです。

「イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。そしてまた、「この人は、ヨセフの子ではないか」と彼らは言った。」(ルカ 4:21-22)

イエス様のことばを聞いた人々は、神をほめたたえると同時に、イエス様がヨセフの子であることにつまずきました。

人は、神に似せて造られたので、私たちの根底には神の思いがあり、私たちは神の思いに動かされて生きています。そのため、人は、真理を求め、変わらない自由と愛を求めています。ですから、私たちは神のことばを聞くと喜びを覚えます。ところが、それと同時に、それに反発する心も起こります。それを聖書は「肉の思い」と呼んでいます。人間は「神の思い」と「肉の思い」にはさまれた存在なのです。神は永遠に変わらないお方ですが、この世界は悪魔のしわざによって死の世界になり、変化する世界になりました。この世界での幸せは変化する中での幸せであり、神が与える幸せは変わらない幸せです。そういうわけで、この世界は神のことばに反発するのです。

「肉に従う者は肉的なことをもつぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」(ローマ 8:5-7)

クリスチャンは神の思いを喜び、真理に生きていこうとします。すると肉の思いによる反発が生まれます。これが苦しみを生じさせるのです。人間は神のいのちで造られ、永遠で規定されているため、変化する世界では苦しみを覚えるのです。私たちが

真理に従って生きようとすればするほど、この世界は私たちに反発します。キリスト教は迫害の歴史です。それは、この世界では教えることのできない真理を教えるからです。そこで、この世は、真理に対して、そんなのは嘘だ、そんなものは幸せではない、と反発するのです。

「イエスは言われた。「きっとあなたがたは、『医者よ。自分を直せ』というたとえを引いて、カペナウムで行われたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ、と言うでしょう。」また、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません。わたしが言うのは真実のことです。エリヤの時代に、三年六か月の間天が閉じて、全国に大ききんが起こったとき、イスラエルにもやもめは多くいたが、エリヤはだれのところにも遣わされず、シドンのサレプタにいたやもめ女にだけ遣わされたのです。また、預言者エリシャのときに、イスラエルには、ツアラアトに冒された人がたくさんいたが、そのうちのだれもきよめられないで、シリヤ人ナアマンだけがきよめられました。」（ルカ 4:23-27）

神のことばは良いものだと思い、感動もするけれど、信じることができないということです。

「これらのことを聞くと、会堂にいた人たちはみな、ひどく怒り、立ち上がってイエスを町の外に追い出し、町が立っていた丘のがけのふちまで連れて行き、そこから投げ落とそうとした。しかしイエスは、彼らの真ん中を通り抜けて、行ってしまわれた。」（ルカ 4:28-30）

人々はついにイエス様に対して、がけから突き落とそうとするほどの敵意を抱くようになりました。今私たちは、神が造られた永遠の世界ではなく、死が入り込んだ後の偽りの世界に生き、偽りの世界に惑わされています。死がある世界を刷り込まれ、恐怖を覚え、その恐怖を和らげることが幸せだと思い込んでいる人々にとって、神が教える真理は敵です。真理は偽りの情報の最大の敵なのです。ですから、クリスチャンが真理に従って生きようとするならば、迫害に会って苦しむのは当然なのです。

「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」（ピリピ 1:29）

イエス様はこの世の敵となり、最後は十字架で殺されました。神を信じるとは、神に属する者になったということです。その人は神から離れることはできません。真理を知ってしまった以上、キリストが歩まれた道を歩むしかないので。キリストは人となって真理の道を歩むとはどのようなことなのかを示してくださいました。

「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」(ピリピ 2:6-8)

これが、キリストを信じる者の道です。なぜこの道を歩くしかないのか、それは、私たちは神に買い取られた者であり、死からいのちに移された者だからです。この世と決別すること、これが十字架で死ぬということです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

私たちはすでにこの世のものではなく、死からいのちに移されたものです。

「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。」(ヨハネ 17:14)

キリスト教の歴史は、迫害の歴史です。しかし、それで終わるものではありません。キリストは天に引き上げられ、神の右に座されました。私たちもやがて天に引き上げられ、神と共に生きるようになるのです。ですから、苦しみはゴールではなく通過点です。私たちはすでに神にとらえられていて、この世のものではないのです。

■苦しみ of 正体

どうすれば、私たちを苦しめるこの世の思いから解放されることができるでしょうか。この世が私たち to 与えてくれる安心は、二つに分類されます。

その一つは、人から良く思われる安心です。愛され、信頼され、評判を得ると、私

私たちは安心します。しかし、神は神とつながることで安心するように教えておられます。なぜなら、人の心は変わるからです。ですから、人から得られる安心は、実はいつも不安をはらんでいます。そのため、神は変わらない神の愛によって安心するように教えておられるのです。

「しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」」（マタイ 16:23）

イエス様の一番弟子であったペテロは、誰よりも人の評判を大切にしていました。そこでイエス様はペテロに対して、「あなたは真理を思わないで、人からどう思われるかを求めている。」と指摘したのです。人からどう思われるか、本当の喜びはそんなところにはないと、イエス様は何度もペテロに語っておられます。しかしペテロは人からの評判をどうしても手放すことができず、イエス様が捕らえられた際、人からどう思われるかを優先し、イエス様を知らないとして3度も否定してしまうのです。あなたは自分が人からどう思われるかを心配して、信仰を明らかにすることができなかったことはないでしょうか。人からどう思われるかを大切にすることが、自分を苦しめているのです。

この世が私たちに与える安心の二つ目は、お金です。私たちはどうすればお金が手に入るかを考え、そこに安心を求めます。人からの評判と富を得ることが、この世界での成功であり、幸せです。しかし、それはまったくの偽りです。イエス様は、「たとえ全世界を手に入れてもまことのいのちを損じたら何になるのか」と言われました。

「イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。」（マタイ 19:21-22）

この世から評判を得ようとするを、聖書は「この世の心づかい」と言っています。そして、富によって安心を得ようとするを「富の惑わし」と呼んでいます。この二つが真理を邪魔して私たちを苦しめているのです。

「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」

(マタイ 13:22)

神が与えようとする安心は、変化する世界での一時の安心ではなく、真理であり永遠の安心です。神が与えてくださる平安は、この世が与える平安とは全く異なります。神は、私たちをとらえたら絶対に離しません。神と私たちを引き離すことは誰にもできないのです。そして、神は私たちを神のほうに力強く引っ張り続けます。このとき、この世にしがみつこうとすると苦しみが生じます。

ペテロもこの青年も、この世の平安を手放すことができませんでした。私たちも彼らと同じく、見える安心を捨てることができないという苦しみに出会います。どんなに苦しんでも、この世に生きる限り、この世の平安を手放すことができないのです。この限界にぶつかり、人は苦しみから苦しみに追いやられます。この苦しみを罪責感と言います。神の要求に応えることのできない自分の弱さに気づくのです。しかし、心配する必要はありません。

「ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」(マタイ 19:22-26)

人の力で見える安心を捨てることは不可能だということです。この青年は、実にまじめで一生懸命なクリスチャンと言えます。でも、お金に対しては執着があり、神にゆだねることができませんでした。彼ばかりではありません。人間には、どうしても見える安心を求めるという限界があるのです。では、どうすればいいのでしょうか。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」

これが答えです。神にはできるから、神のところに持ってくればよいとイエス・キリストは教えておられます。苦しみを自分で背負うのはやめて、キリストのもとに持っていきましょう。自分では絶対に解決できません。

■苦しみを神に差し出す

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ 11:28-30）

「くびき」とは、神に従って生きる苦しみのことです。私たちは、神に捕らえられ、キリストと同じくびきをつけられたことによって、神から逃げられなくなってしまいました。つまり、真理を歩むことしかできなくなってしまったのです。真理は、この世から私たちを引き離します。私たちは、その苦しみを負うことになったのです。しかし、苦しみの先には、必ず平安があります。この苦しみを学んだことを通して、魂に安らぎを得るのです。

この苦しみとは、神の要求に応えられない自分に気づき、自分の弱さ、自分の不足に気づくことです。その罪を認め、その重荷を、キリストのもとに持っていくなら、キリストがそれを背負い、あなたの不足を補ってあげると言ってくださっているのです。「苦しみは、あなたが背負うものではなく、私が背負うものだ。それなら、あなたの苦しみは軽いでしょう。」と、イエス様は言われます。

私たちがすることは、助けてほしいと神に叫ぶだけです。イエス・キリストは、そのために十字架にかかったのです。十字架の贖いがあなたの不足を補い、あなたを完全なものとして立ち上がらせます。これが義とされるということです。このことを通して、私たちは神と結びつきが強くなっていくのです。

神はあなたができないことを決して責めません。それを告白して神に助けを求めないことを責めるのです。神に助けを求めること、そう祈れることが、すでに神の恵みです。その祈りを通して、あなたは神に近づいたのです。神に近づくことが祝福です。その結果、この世界で身に着けた見える安心を手放していくことができるのです。それがこのように対して死ぬということです。そのようにして、この世に対して死に続け、やがて天に引き上げられるのです。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」

（ヨハネ 14:27）

世が与える平安は変化します。この世の平安に頼っていると、その変化に心に向けていかなければならないので、心は疲れ果ててしまいます。神が与える平安は、どんなことがあっても神に愛されていることを知る平安です。あなたがどんなに罪深くて、神はあなたを愛し、あなたと一つになろうとしてくださいます。ですから、迫害されても恐れることはありません。苦しみは苦しみで終わる事はありません。この世の苦しみは苦しみのままですが、キリストを信じる者の苦しみは、その先に必ず平安があります。

ペテロはイエス様を裏切りましたが、イエス様によって引き上げられました。それをこのように告白しています。

「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」（Ⅰ ペテロ 5:10）

私たちは、健康、富、地位、友人関係などが得られないなど、いろいろなことで苦しみを感じます。しかし、そのあと私たちは神の恵みによって強くしてもらえます。神の恵みは弱さのうちにこそ現れます。神の前にへりくだり、自分の弱さを認めるなら、神があなたを助け、あなたを支えます。そして、あなたはゆるぎないものとされるのです。もし、あなたが頑張るのであれば、恵みは表れません。

苦しみの先に、真の平安があります。ですから、今苦しみを覚えている人は幸いだといエス様は言われました。

「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」（マタイ 5:10-12）

苦しみこそが、まことの平安への道であり、私たちを導くコンパスです。苦しみを覚えたら、それは真の平安への道です。神と正しい関係を築く唯一の道なのです。苦しみに出会ったら希望をもって祈りましょう。そして、神の恵みの中で生きる道に進みましょう。